

コミュニティー再生を考察 成功例とされている地区でも実は課題が

この3月に卒業した馬渡ゼミの3人が『震災とコミュニティ』（志學社、2015年）の出版に際して、所感を寄せてくれました。

第1章を担当した社会科学4年（当時）の村田佳代さん

岩手県大槌町を事例に、なぜ同一自治体内の避難所運営で差異が見られたのか、その成功と失敗の要因について検討しました。大槌町では、運営が円滑であった地域



と困難な地域がありました。なぜこのような違いが生じたのか、その要因を探求し、どのような結果をもたらしたのかのほか人と地域のつながりの重要性について考察しました。

コミュニティの存在が避難所運営に大きな影響を及ぼし、避難所運営の成功例と称賛されている地区でも、実は様々な課題があることをも浮き彫りにしました。

第2章を担当した同4年の横山紗希さん 福島原発事故から避難する過程で、住民は

散り散りになり、その長期化と多様な避難形態でコミュニティが分断されるまでに陥った福島県・浪江町を取り上げました。そもそもコミュニティがなくなることがなぜ問題なのか、住民の分散と浪江町の方断の過程を検証し、その重要性を確認しながら問題点を考察しました。町が取り組むコミュニティ再生や町民のつながりを取り戻すための努力についても描いています。



第3章を担当した同4年の遠藤優太さん

従来型の仮設住宅や住宅復興方式は、コミュニティの維持はもとより形成にまで配慮されておらず、様々な社会問題を生み出すことが指摘されています。従来方式は、ハコモノとしての住宅供給に重点が置かれ、仮設住宅や災害公営住宅の居住の快適さや地域コミュニティの維持は、あまり検討されてこなかったのが実状です。

この章では、居住性に優れ、コミュニティの維持への寄与が期待されるコアハウス方式に着目し、従来方式と比較し、現状や課題について分析しました。また、なぜこのよう

な課題が生じたのか、その原因について考察した上で課題解決に向けた方策となりうる同方式の導入の是非について検討しました。



編著に当たった馬渡剛准教授

本書は、東日本大震災とコミュニティをテーマとしています。東日本大震災のような広域的かつ激甚災害では、被害をゼロにすることは不可能であるものの、少なくとも事前の取り組みや準備によって被害を減じることが可能です。

震災時、執筆者の学生たちは大学入学直前でした。本書は被災者でもある彼らが大学4年間、震災について考え取り組んできた成果です。茨城大学の学生の皆様は、東日本大震災を経験した、いわゆる3.11世代として、今後、社会に出てからも東北の復興や今後予想される大震災について折々につけ考えていかなければならないでしょう。なぜなら学生が今後、社会に出て現役で働く時期と、被災地が復興していく時期は重なるからです。復興を担う3.11世代の可能性を少しでも示すことができれば、本書の目的の一部は果たされたと言えるでしょう。 (終)

